第３回小児作業班 平成３０年３月９日	資料2

前回までの作業班における主な意見等

第一回作業班（平成29年2月24日開催）

（1）普及・啓発について

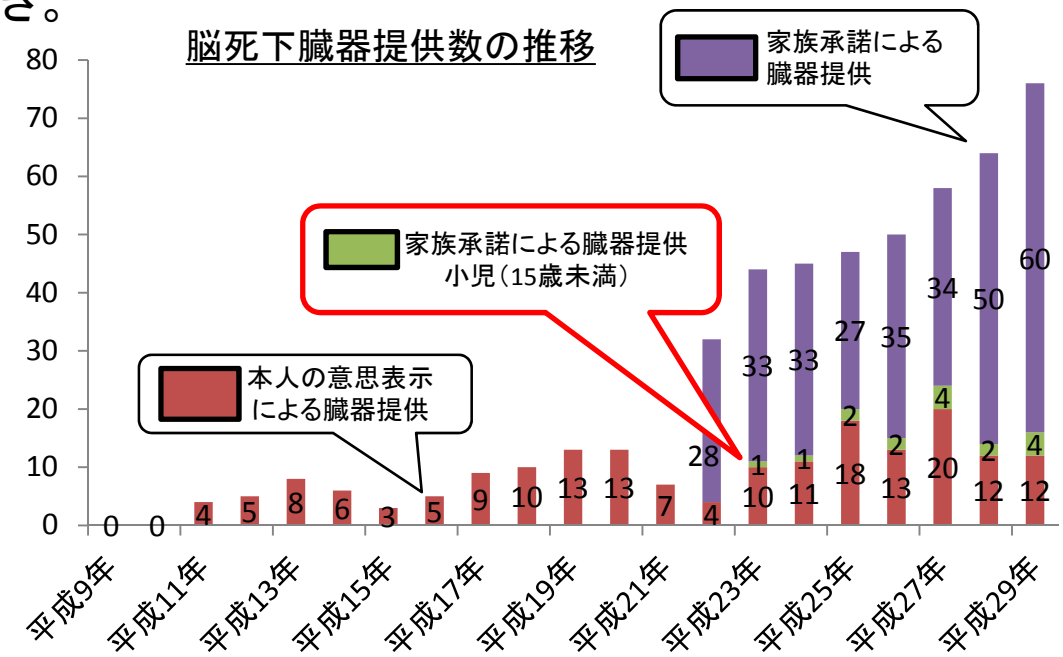
- ✓ 日本小児循環器学会では、命の授業というプログラムを移植委員会で作成しているが、現状では学校の授業で十分に取り入れられていない。
- ✓ 提供についてだけでなく、移植後の成果についても普及・啓発が重要。

（2）臓器の提供施設における環境整備について

- ✓ 臓器移植を、グリーフケアの一つとして展開できないか。
- ✓ 家族申し出があったにもかかわらず提供に至らなかった事例を分析し、課題を検証し改善策を検討すべき。

（3）虐待への対応について

- ✓ 臓器提供にかかわらず、子供が亡くなった場合には、医療機関において、虐待の有無をすべてチェックする体制を整えるべき。
- ✓ 相談窓口を作るべき。



第二回作業班（平成29年8月2日開催）

1．富山大学種市先生；子どもの死亡症例対応として、グリーフカードを家族に渡している。急性期に我が子を喪失した家族のメンタルケアとして有意義。

今後の課題

虐待評価（児相、警察との連携、各委員会の役割）、こどもの脳死判定の実施経験
小児脳死患者の全身管理、グリーフケアの充実

2．埼玉医大荒木先生；小児救急医学会会員1680名への意識調査（2016年）　回答率23.8%

「小児の脳死を死として受け入れる」	56.1→65.8%
「家族に臓器提供の話が出来る」	65.7→83.9%
「小児からの脳死下臓器提供は必要」	64.5→81.0%
「親族に対するケアは現状で不十分」	61.7→54.9%
「虐待の除外ができないor出来るか不明」	89.3→78.5%

3．東京大学水口先生；脳死判定における課題；虐待への対応、提供施設の限定、看取りの医療体制の未整備

4．トキワ松学園佐藤先生；高校の保健で、生老病死をテーマに講義。2000年から開始し、講義では歴史や現状について伝え、きっかけから知る・家族と話し合う場の提供にとどめる。「生」は宇宙誕生から植物、動物、生命誕生、「死」は移植医療、尊厳死、安楽死、平穏死について講義

今後の課題

次世代を担う児童・生徒がいのちの大切さについて自ら考えることができるよう、「指導案」の作成が必要